

## REPORT. II

### 特集：コロナ禍と向き合う民鉄各社

[沿線のライフラインとしての責務を果たし、信頼を得る]

# コロナ禍を機に地域連携を強め 地域鉄道の存在を示す

コロナ禍は地方鉄道にも大きな影響を及ぼした。そうした中、秩父鉄道は需要の変化に対応して早期に減便を実施する一方で、「おうちで秩父鉄道」プロジェクトを立ち上げ、秩父鉄道の魅力を発信するなど、地域との連携をさらに強化している。ウィズコロナの地域鉄道のあり方について、大谷隆男代表取締役社長にお話を伺った。

聞き手・文 茶木 環 (作家/エッセイスト) 撮影●織本知之/写真提供●秩父鉄道株式会社



秩父鉄道株式会社 代表取締役社長

# 大谷隆男

Takao OOTANI

#### 4月中旬に減便を決行

——コロナ禍での全鉄道事業における影響は非常に大きいものですが、秩父鉄道ではその状況をどのように受け止められましたか。

**大谷** 旅客数に影響が出てきたのは2020年2月頃で、最初はそこまで深刻な状況になるとは想定していませんでしたが、3月に入ると急激に影響が出てきて、特に通勤・通学の定期利用の継続の数が激減したんです。当然、

払い戻しを希望される方も多くなりました。各駅では現金収入が減少し、駅によっては払い戻す現金が底を突くんじゃないかと心配したほどです。そういう現実的な場面に幾度も遭遇しながら、社員も私も経営陣も深刻な状況を実感していったわけです。

2020年3月期の決算は、想像もしていなかったような非常に深刻なものとなりました。特にグループ会社への貸切バス事業は稼働が大幅に減少し、大きな赤字を計上せざるを得なくなっ

た。今年度が当社の中期計画(3年)

の最終年度で、コロナの問題が発生するまでは比較的順調に推移していましたが、実は26年ぶりの配当まで何とか手が届きそうなところにたどり着いたのですが、残念ながら未達にならざるを得ない。交通事業を含めて各事業をどのように継続し、回復させていくか、先行きが不透明な中で苦戦を覚悟し、緊急避難的なことも含めて模索しながら行っているところです。

——そのような中で鉄道事業では具体的

にどのような施策を取っていますか。

**大谷** 当社は旅客・貨物の両方を行っています。旅客・貨物それぞれの状況を踏まえ、4月13日に計画運休に踏み切りました。当社の減便対応は鉄道事業者の中でも比較的、早かったのではないかと思います。急行列車や西武線との直通列車は全て運休し、一部、始発列車の繰り下げや最終列車の繰り上げをして全体の運行本数を3割ほど減らしました。その後、少しずつ増やし、現在では以前の8割程度の本数と

## 特集：コロナ禍と向き合う民鉄各社

【沿線のライフラインとしての責務を果たし、信頼を得る】

——ワークスタイルでもリモートの打ち合わせや会議が増え、もともと働き方改革ではなかなか進まなかった部分があり、コロナ禍で一気に進んだという部分があります。秩父鉄道にも、それまでの課題を前に進めることができた点がありますか。

大谷 働き方という点では、こうした状況下において、在宅勤務や完全な休業などいろいろな仕分けをしながら実施

しています。高密度にならず感染リスクを避けながら運行できていますので、例えば、利用される皆さんのニーズに応じたダイヤ編成や私も社員の働き方の改革につなげていけるような施策などを検討することも見据えています。

社員の取り組みを財産と考える



——コロナ禍の中で誕生したWEBサイト「おうちで秩父鉄道」ではさまざまなコンテンツが公開され、鉄道と大谷 サイトを制作しているというところは知っていましたが、「おうちで秩父鉄道」という名前は、私は公開されて初めて知りました（笑）。それだけ社員を信頼しているということなんです。このサイトで公開しているコンテンツには新しくつくったものも、これまであったものも掲載しています。例えばパークラフトは、イベント来場者へのノベルティや記念入場券の台紙として製作していたものです。これまで見本としてHPで公開したことはありましたが、「おうちで秩父鉄道」では実際につくっていただけるとして公開しました。手持ちのデータの中から、お家で楽しめるものの掘り起

してみると、驚いたことに時間外労働がゼロになったケースが多かったんです。皆、効率よく仕事をしてくれている。やるうとしてもなかなか進まなかったことが実現できました。私どもの鉄道はワンマン運転が進んでいますので、そうした意味で現業職の効率化は進んできている状況ですが、管理部門についても、企画部が秩父駅にサテライトオフィスを設置して運用を開始し、サテライトオフィス勤務の環境を整えました。また、在宅勤務でも自発的に仕事に取り組み、さまざまなアイデアで新しいことを進めてくれています。

——コロナ禍の中で誕生したWEBサイト「おうちで秩父鉄道」ではさまざまなコンテンツが公開され、鉄道と大谷 サイトを制作しているというところは知っていましたが、「おうちで秩父鉄道」という名前は、私は公開されて初めて知りました（笑）。それだけ社員を信頼しているということなんです。このサイトで公開しているコンテンツには新しくつくったものも、これまであったものも掲載しています。例えばパークラフトは、イベント来場者へのノベルティや記念入場券の台紙として製作していたものです。これまで見本としてHPで公開したことはありましたが、「おうちで秩父鉄道」では実際につくっていただけるとして公開しました。手持ちのデータの中から、お家で楽しめるものの掘り起

こしを行ったわけです。一部で人気だったものや社員が車内から撮影した前面展望の動画や沿線観光地のPRムービーなど新たなコンテンツを掲載して、より広く皆さんに親しんでいただけるサイトができました。思っています。

また近年は、映画や音楽といったこれまでにはないコンテンツを制作しています。昨年、当社は創業120周年を迎え、その記念事業の一環として映画を制作し、記念式典で上映しました。音楽ではコロナ禍で疲弊した地域を応援する目的でつくった「ハッピー☆ハッピートレイン」という曲があります。企画部の社員がアイデアを出し合って、ミュージシャンをはじめ地元の方々を中心につくってもらったものです。

——社員の皆さまも積極的に活動されていますか。

大谷 地域のFMラジオ局には社員たちがゲスト出演して、パーソナリティーと会話しながら当社のことをPRしています。「いやあ、この人こんなに話がうまかったのか」と驚くことも多いですよ（笑）。今年2月に運用を終了した「石炭貨車オホキ10000形」引退記念乗車券は、社員が描い

た絵を基に作りました。うちの社員たちは多才な人が多く、楽しみながら参加してくれている。これは社長としては大きな誇りでもあります。

観光事業も新たな展開に

——コロナ禍で社会の中でリモート化が進む一方で、リアル的重要性についても皆が実感していると思います。特に観光は実体験から感動を味わうというリアルな部分も大きいと思います。観光鉄道という役割を持つ秩父鉄道では今後、観光業を推進していく中で留意される点はどこでしょうか。

大谷 当社の沿線に秩父や長瀬といった一大観光地がありますし、観光など定期外のお客さまは非常に重要な存在です。公共交通はそうだと思うんです



現在の運行本数は減便前の8割程度まで回復した



五輪カラーのEL

態ですか。

が、鉄道は車両が共有空間となりますので、密度を気にされる方は多い。駅や車内衛生には私たちも配慮していますが、密度という点では、ウイズコロナの時代で鉄道を使った観光を考えると元の形に戻るのには非現実的だと思います。今、観光事業の方では予約制にして、利用者同士の密接度を低減して、安心して使っていたくことを進めていて、これをSLやEL（電気機関車）のパレオエクスプレスにも採用していく予定です。30年以上の運行の歴史を持つSLは8年に1度、定期検査があり、それに当たる今年にはELを楽しんでいただいています。実は東京オリンピック・パラリンピックの聖火リレーでも五輪色のELが五重連で客車を牽引して走行する予定となっています。

——今、沿線の観光地はどのような状

大谷 特に長瀬ではライン下りやラフティング、宝登山にはロープウェイで山頂に上がることもでき、基本的には屋外のレジャーで密度の心配が少ない。今夏は猛暑でしたので、皆さん、時勢としては遠出はされなければいけません。涼やレジャーを求めていらしたの

でしよう。8月の段階では観光客数では9割以上、戻っています。マイカーが過半ですが、車のナンバーは同じ埼玉県内がほとんどです。これまで南関東からのお客さまが中心だったので、このような状態は初めてですね。新たにこの地域に関心を持たれる方に向けて、自然を満喫していただける地域であることを今後もアピールしていきたいと考えています。

現在、マイカーで来られる方を鉄道や貸切バスでの移動に何とかつなげていければと模索中です。

### 地域活性化で地域鉄道を維持する

——先行き不透明な中ではありませんが、パンデミックを経験して、地域の鉄道としてどうあるべきか。どのようなことを目指しておられるか、今後の展望をお話いただけますか。

大谷 私どもは公共交通として事業継続が使命であり、沿線地域に貢献する役割を担っています。私も社長を務めて10年になりますが、地域鉄道というのはどこの事業者も実績があり、いろ

いろ工夫をしながら事業を継続されてきているけれども、当社も含めてやはり経営的には厳しいところが多いんです。自社だけで何かをやるというのは限界がある。当社のことを皆さまに理解していただくことが第一で、発信のほか、沿線5市3町の自治体や沿線住民、利用者の方々と一緒にいろいろなことに取り組むことで、鉄道をより深く理解していただきたいと考えています。地方での鉄道事業の存続は、皆さんの理解があつてこそ実現できると思っています。

——具体的にはどのような連携をされているのでしょうか。

大谷 2018年10月にふかや花園駅という新駅（深谷市による請願駅）ができましたが、駅の隣接地に、2022年春にキユーピー株式会社による体験型の農業施設「深谷テラスヤサイな仲間たちファーム」、同年秋には三菱地所・サイモン株式会社による17・6万㎡の「ふかや花園プレミアム・アウトレット（仮称）」がオープンする予定です。これを好機にして、

周囲の地域や鉄道への人の流動をつくりたい。当社はもちろん、沿線の他の自治体の期待も大きく、観光連携をさらに深めようという動きが出ています。また、国・県・沿線自治体の協力をいただきながら、非接触ICカードの当社での導入も構想段階にあります。

事業を取り巻く地域の環境は大きく変化しますので、われわれも積極的に連携をとっていききたい。地域もそうですし、例えば相互直通運転を行っている西武鉄道、それから関東地方でSLを走らせているJR東日本や東武鉄道と連携を強め、相互の鉄道利用を高めていきたいと思います。

現在、沿線観光地はマイカー利用が多いのですが、マイカーや貸切バス、鉄道を併用して、長瀬や秩父をはじめとした沿線各地、それから新しい施設の魅力を堪能していただく。そうすれば地域では雇用が増え、若い人材も定着する。時間はかかるかもしれませんが、そうした将来をまたつくり上げていきたい。安全・安心を基盤にして、当社の事業とともに地域の活性化を図っていく。そしてチャンスに対してロスのないように、各所が協力をしながら盛り上げていく。ウイズコロナの時代にもしつかり土台をつくって成し遂げていこうと考えています。

